

《書評》

ニコラス・エバースタット 『北朝鮮最期の日』

富山泰・渡辺孝 訳 恒文社、二〇〇三年二月

野副伸一

北朝鮮の核・ミサイル開発による恫喝外交が進展する中、北朝鮮の狙いとその背景を理解するのに格好な本が出版された。それがこの書評でこれから紹介しようというエバースタットの『北朝鮮最期の日』である。本書の特徴は、あ

とがきにもあるように、「北朝鮮に対する融和政策がいかに無益であり、危険であるかを訴える警世の書である」という点だ。

原著は米国のクリントン政権が朝鮮戦争以来の北に対する経済制裁の緩和を発表した直後の一九九一年一月に出版された。米韓日三国による対北融和策に異議を唱えた本書は、米国内で大きな反響を呼んだ。ニューヨーク・タイムズ、ウォールストリート・ジャーナルといった有力紙や、外交評論誌フォーリン・アフェアーズが書評欄で取り上げ、またエズラ・ボーゲル・ハーバード大教授やポール・ウォルフオウィッツ・ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究所所長（現国防副長官）も本書を絶賛するコメントを寄せたという。

日本語版は原著の発行から三年余り経って出されたが、現時点で読んでも内容的に何ら古さを感じさせない。むしろ著者の分析は、事実の

展開によって輝きを増している。

著者の主張は、「大量破壊兵器による脅しを段階的に強めていくことが、北朝鮮国家の延命のために望ましいだけでなく、絶対に不可欠」（P.228, 229）というのが北の認識であり、それを放置することは南北統一のコストを増大させるだけでなく、東アジアの平和と安定に大きな脅威を与える、というものである。

著者のエバースタットは、あつがきによると、ワシントンの有力シンクタンクであるアメリカン・エンタープライズ公共政策研究所（A E I）の客員研究員で、国務省や世界銀行のコンサルタントを務めた経験を持ち、北朝鮮に関する著書が多数ある。

本書の内容を簡単に紹介したい。本書は六章で構成されているが、各章の内容のポイントは以下の通りである。

第一章、「ポスト北朝鮮」に向けて」では、金王朝という特異な社会主義体制を構築した北朝鮮は、ソ連の崩壊により今や瀕死の状態にある。北が直面する危機は複合的なものであるが、特に食糧危機は他の社会主義国と違って、体制発足後四〇年以上経って起ったものであ

り、根が深い。「イデオロギーと文化の浸透」による体制崩壊を恐れる北当局は、太陽政策を推進する韓国の思惑は先刻承知であり、改革へ向かう気はさらさらでない。むしろ「絶えず危険を増すことで、贈り物攻勢で北を宥めるしかない」と近隣諸国を観念させるつもりでいることは明らかだ（P.54）。今日、北への融和政策が取られているのは、弱い政府は理屈抜きに融和政策が好きであるからだ。

第二章「民族のねじれ 究極の統一はあるか」では、北の統一政策の変遷が語られている。朝鮮半島の統一計画は、北にとって初めから最も重要な政策目標であり、国家戦略であった。朝鮮戦争はその発動であったが、悲惨な読み違えでもあった。それにも拘らず北は統一計画を基本的には変えなかつたようだ。その後の統一政策は、力の蓄積段階（一九五三～六二年）、賭けの段階（六二～七九年）を経て、今日行き詰まりの段階（八〇年以降）を迎えている。九〇年代末の時点で、北は暫定的に政権を延命させる一時しのぎの交渉を一種の「生命維持装置」とし、それで機能している国家である。

第三章「北朝鮮経済が直面する三つの課題」では、北の経済が今日直面している問題を三つに分けて論じている。第一は「戦争経済」、つまり戦時総動員を目的とした種々の中央集権型計画経済システムが抱える問題である。この点に関しては、特に国防支出負担の大きさが論じられている。第二は外部からの重大な経済的衝撃が中央計画経済、戦時経済に及ぼす問題が挙げられる。特に九一年の対ソ貿易激減によるショックが言及されている。第三は共産主義経

済下での深刻な食糧不足に伴う一連の諸困難である。ここでは北の食糧危機が他の共産主義国家のそれと相違している点が詳細に分析されている。

第四章「『太陽政策』と貿易のひずみ」では、「貿易を通じての和解」、即ち南北間の経済交流拡大によって、朝鮮半島の緊張が軽減され、敵対国家間に真の和解の道が開かれるとする見方の可否が検討されている。著者の判断は、その可能性は小さいというものである。その基本的理由は、「北の対外戦略（あるいは国内の政治構造）が抜本的に変わったことがはっきりしない限り、通商が南北関係を改善させる外交上のこととして機能すると期待することは合理的ではないし、非現実的である」（p163）からである。

第五章「米朝経済関係の見直し」では、北の貿易や対外債務の意味合いが論じられている。都市化されている経済であるにも拘わらず、北の一人当たり年間輸出額は五〇ドルと異常に低い。これは北の主張する「チュチェ及びそれと相関関係にある『自立的社会主義経済』建設による。しかし気乗り薄な通商関係とは裏腹に、海外からの経済支援の獲得努力は『執拗かつ集中的で、非常に巧妙だった』（p189）。他方『北と西側諸国の経済関係は、約一〇億ドルの商業融資に対する七〇年代半ばの債務不履行により、深刻な打撃を受けているが、北は融資を贈与のごとく扱った結果、国際的な信用を損ね、通常の貿易金融を受けられなくなり、世界市場での大半の取引をパートナーにするしかなかった』

(P194)。

第六章「南北統一のコスト」では、「さまざまな証拠から見て、北の衰退傾向を逆転させるのは難しい」（p221）と見る著者は、自らの体制を救うため北が採りうる措置として、南北統一の放棄や金王朝の放逐（非スターリン化）が考えられるが、北がこうした現実路線を採ることは不可能であると見る。残された道は、近隣諸国はもちろん、もっと遠くの敵対国に対しても大きな被害を与えられる力を増強し続けるという道である。即ち、大量破壊兵器による脅しを段階的に強めていくことで、北体制の延命を図る道である。

そういう状況にあっても韓国は統一を急がず、ゆつくりやるうと考えている。しかし、統一が遅れば遅れるほど南北間格差は拡大し、経済的重荷は増大してくるし、北東アジアの安全保障と経済的繁栄を狭めることになる。ではどうしたら良いのか。韓国が「自由で平和的な統一朝鮮の実現を意図的に準備、促進する政策」（p245）を進めることであり、同時に経済改革を進め海外直接投資が入り易い政策をつくることである、と著者は主張する。

以上が、各章の大雑把な要約である。読みごたえのある本である、というのが評者の読後感でもある。北朝鮮や統一問題についての認識に共感する点が多く、米国人でもこういう見方をしている人がいることを知り、嬉しく、且つ励まされる思いがした。北経済の構造分析にページが多く割かれているのも本書の特徴である。著者の南北朝鮮についての知識は半端なものではな

く、鋭い指摘にしばしば驚かされた。

その例を一つだけ紹介しておこう。「北朝鮮にとり、黒倒の対象である資本主義世界からの資金を懐に入れることは、イデオロギー的に何の問題もない。昔の東アジア秩序での朝貢国としての伝統的な朝鮮の役割と正反対に、チュチェ外交は貢物を要求する外交であり、すべての貢物はよい貢物なのだ。貢物は、北朝鮮国家の国内的活力を強めるだけでなく、北朝鮮の国際的地位を確認し、北朝鮮の外交政策の正しさを立証し、北朝鮮の国際的権威にお墨付きを与えるものだ」（p53）。この指摘は核心を突くものと言わざるを得ない。

最後に、敢えて本書に注文を付けたら、次の二点があろう。第一に、著者は北が核・ミサイル開発による恫喝外交に進むしかないことを正しく予測したのだが、それに対して米韓日三国がどう対応すべきなのが具体的に考察されていないことである。

第二に、第一と関連するが、「自由で平和的な統一朝鮮の実現」は極めて望ましいが、大量破壊兵器で武装した北を相手にどうやったら可能なのか。北で宮廷クーデターでも起こり、金正日が排除されればその可能性も出てこよう。しかしそうでない場合、一戦を交えてやるしかないのではないかと。

日本の安全保障と深く関わる朝鮮半島の激動が予想される現在、日本は「ポスト金正日」に早急に備えて置く必要がある。本書は我々日本人にとっても「警世の書」なのである。

(のぞえしんいち・アジア研究所教授)